

熊本地震

—同志社はいま何ができるか—

●出席者

きのしたとしお
木下智夫 (同志社校友会 理事・熊本県支部長)

みづたによしひろ
水谷嘉浩 (Jパックス株式会社 代表取締役)

こしかわひろひで
越川弘英 (大学キリスト教文化センター 教授)

●司会

うえだまさひろ
上田雅弘 (大学ボランティア支援室長、大学商学部教授)



地震発生時の状況

上田 ●熊本地震から3カ月という月日が経とうとしています。いまだに多くの方が避難生活をされています。同志社ゆかりのジェーンズ邸が全壊し、徳富記念園も被害を受けている状況です。同志社にとって関わりの深い熊本に何ができるのかについて、本日は探っていかれたいと思います。まず、地震発生時の状況と現在の状況を、校友会熊本支部長の木下さんよりご説明をお願いします。

木下 ●今回の地震に際しまして、多くの皆さん方からお見舞いの連絡をいただきました。特に同志社創立140周年の記念イベントとして、1月29日と30日に熊本市で開かれた「同志社フエア in 熊本」には、九州域外からも約130名の校友関係の方々にお越しいただきました。30日は早天祈祷会の後、ジェーンズ邸と徳富記念園、熊本バンドを継承する熊本草葉町教会などのゆかりの地を巡っていたのですが…。3カ月後にこういう大きな地震に遭遇しました。14日の地震、後に前震と云われ地震のときは仕事から

帰宅した直後、柱にもたれながら靴下を脱いでいる時、いきなりガーンとききました。

上田 ●縦にドーンときた感じですか。

木下 ●そうですね。いきなり家全体がきました。揺れは結構長かった気はするんですが、台所で鍋などが落ちたぐらいで、書棚もタンスも倒れることはありませんでした。震源は、熊本市の東側に隣接する益城町でした。1時間後には、暗闇の中で消防や救急隊が動くといったニュース映像がぼんぼん出てきました。そのひどさというものは自分たちも経験がなく、大変な状態になっていました。ただ余震があるという予測も出ていたのですが、14日、15日の夜はまだ我が家でいつでも逃げ出せるようにと準備していました。16日の本震の時は、たまたま早目に寝ていたのですが、瞬間的に、何が起ったのか分かりませんでした。

上田 ●前震よりも、かなりきつく感じられたのですか。

木下 ●眠りの中で激しい音と大きな揺れ。目が覚めても何か揺れている。何だこれは？と、自分自身が認識するのに相当時

間がかかり、アツと思いつつも動けませんでした。あまりにも強烈過ぎました。「もうだめか」とそういう気持ちもよぎる中で揺れが少し静まった時に家から出ました。停電でした。まだ道路が波打っているんです。自分一人じゃ立つておられず、女房とお互いに抱き合ったまま耐えていました。二本柱では厳しいので、四本柱で。

上田 ●その間もずっと揺れていたのですか。

木下 ●ずっと続いているんです。後で分かっていたんですが、午前1時台の本震の後、立て続けに震度5、6の揺れが続きました。震度7が14日と16日。過去に例のない地震だそうです。16日だけで余震の数は200回程です。夜が明けて家に帰ると家の中はタンスも書棚も全て倒れ、着物や本が部屋いっぱい散乱していました。

上田 ●避難先は認識されていたのですか。

木下 ●いや、全く考えたことはなかったです。自宅は熊本城の北側の丘陵地区に在り、大雨による水害すら考える必要のない地域です。ただ、自宅周辺でも日本

瓦のおうちは瓦が落ちていました。15日は、熊本城内を抜けて自分の事務所に行こうとしたところ、熊本城の戌亥櫓の一部が落ち、石垣が崩れていました。16日は電灯も1時間半ぐらいでつきましたが、それと同時に自衛隊のヘリと思いましたが飛び交い、ライトを付けて被害状況を調べていたようです。大きな被害の出た益城町は熊本市に隣接した田園地帯。スイカやメロンの特産地です。現在はテクノ関係の工業団地もあります。この30、40年で人口も大きく増加。熊本市のベッドタウンの役割も果たしている町です。未だに民家の崩壊現場は手つかずの状況です。ジェーンズ邸は、14日の段階では若干壁が落ちているだけと聞いて少し安心したんですが、17日の新聞には崩壊直後の写真が載っていました。

上田 ●2度目の地震で全壊したのですか。

木下 ●はい。典型的な直下型地震、台座の上にあつた建物が浮き上がって、ドーンと崩壊したようです。

同志社ゆかりの
ジェーンズ邸崩壊

上田 ●熊本へ実際に行かれた越川先生や、避難所に段ボールベッドを届けられた水谷さんにも当時の状況についてお伺いしたいと思います。

越川 ●私は2カ月ほど経った6月9日に熊本へ参りました。本当に短い時間しかおりませんでしたので、益城町など他の状況は全然存じ上げておりません。最初はジェーンズ邸を見学しました。もちろん中には入れず、ブルーシートが全体にかかっていた。ところどころから梁柱、瓦などが整理されているのが見えましたが、その一角だけが、ぼかすと沈んだようでした。

上田 ●周りの建物はどのような状況でしたか。

越川 ●すぐ横が水前寺公園の裏壁になっていて、一部崩壊して公園の中が見えていました。周りの民家も確かに壁の一部が崩落している所もありましたが、建物全体が潰れてしまっているのはジェーンズ邸だけでした。もともとジェーンズ邸

は何度も移設されているんですね。組み立てては分解することを繰り返した結果なのかなとも思いました。

木下 ●ジェーンズ邸は既に3回移築しています。最初は1871年に熊本城内に洋学校教官宿舎として建てられました。当時の部材を持って回っているわけですが、熊本県内における木造洋風建築物としては最古のものです。

越川 ●ジェーンズ邸見学の後、熊本草葉町教会という、これも同志社にゆかりの深い教会に伺わせていただきました。そこに今おられる、同志社大学神学部卒業の難波牧師から震災の様子を伺ったところ、教会そのものは大きな被害はなかったそうです。ただ牧師は、「教会員の方たちに安否を問うと、皆さん『大丈夫です』と答えられますが、実際に行ってみたら結構被害がすごかった」というお話をしておられました。頑張っている、頑張り過ぎていよう方たちもたくさんおられるのだろうと想像します。

上田 ●そういった意味では、何カ月もたちますと、心に蓄積した悩み、ストレスも気になるところですね。

つとします。皆さんは、まず命の保全をしたけれども、その後はなかなか気が休まらず、睡眠が取れないという状況だったと思います。

想定外規模の災害に対して
遅れをとった行政

上田 ●最初行かれた時は、段ボールベッドはもうお持ちだったのですか。

水谷 ●いいえ。そのときは私一人で行きました。雑魚寝という問題がありますので、調査を兼ねて入ったのですが、行政などの対応がこれからという段階でしたので、一旦は大阪に戻りました。

木下 ●私も2晩は車中泊をして、3日目に地域の指定の小学校の体育館へ行ききました。

上田 ●地震後、一番初めの段階で食料の配給はどうされたのですか。

木下 ●熊本は地震がないことや、南海トラフ等の問題を含めて、空港などが九州における避難用地の指定を受けようとしていたわけですが、このようなことになりました。自衛隊が支援物資を運ぼう

越川 ●そうですね。それから今、熊本市内のホテルは満杯と聞きました。復興のため、建築関係の方たちが泊まられる。震災直後の現実はどういうところにも現れているのかなと感じました。

避難所の状況

上田 ●水谷さんは被災地へ段ボールベッドを届けられたということで、まさに寝泊まりに関わる場所での状況をお聞かせいただければと思います。

水谷 ●私は、いわゆる前震の話聞いた時は、嘘だろうと思いました。東日本大震災から10年は来ないだろうと思っていたので、誤報ではないかと思っていました。ところが震度7ということで、すぐに出張の用意をして、翌日には熊本市内に入っていました。そして熊本城前のビジネスホテルで寝ていたら本震が起こりました。地震を体験できる「起震車」という装置で起こす震度7の揺れとは桁違いでした。起震車の揺れは左右だけです。今回の本震は上下左右で、例えるなら、部屋がくじ引きの抽せんの箱を振る

としましたが、受ける側の行政側の体制とうまくつながっていなかったため、持ち込まれた荷物が下ろせないということがありました。恐らく想定外の地震でしたから。熊本市の場合は3日分の備蓄が一晩でなくなりました。

ボランティア活動で
重要なことと
学生ボランティアの意義

上田 ●実際にボランティア団体などが入ったのはいつ頃でしたか。

木下 ●熊本にボランティアセンターができたのは、4月27、28日じゃなかったでしょうか。それから4、5日後には2016年4月1日にできた組織である同志社のボランティア支援室の学生を8名送



り込んでいただきました。

水谷 ●社会福祉協議会などでは、ボランティアセンターというのを開設するんですけど、熊本は少し時間がかかりましたというの、交通が遮断されているところへ物資を輸送するトラックなどが入って人が殺到するとまずいということ、開設を遅らせたのではないかとというイメージがあります。マンパワーという意味では、少し遅めのスタートだったかと思えます。

上田 ●ボランティアは何かしたいという思いで行くわけですが、運営するセンターが一番大事だと思います。今回、ボランティア支援室から学生8名、職員2名が熊本市に行かせていただいたわけですが、実際に活動したのはボランティアの受付であるとか、活動先とのマッチング、誘導等です。

木下 ●熊本市が受け持つのは熊本市内だけで、ボランティアセンターから車で20〜30分先の益城町には踏み込めません。そのあたりはもう少しどうにかできないのかなと思います。

水谷 ●東日本大震災以降、例えば広島の

土砂災害の時も、昨年の常総の水害、桜島の噴火の時も現地に行きました。いろいろなところを見てきたのですが、つくづく思うのは、行政というのは被災者でもあり、かつ支援者でもあるんですよ。自分たちも大変なのに、自分たちの市民住民を支援しないといけない。そもそもそこに無理があります。1日48時間働けと言っているのと一緒で、そこに例えばボランティアなり、物資なりがプッシュ型で来ると、たちまち対応し切れなくなります。一方で避難所には、食べ物がない、トイレがないという状況があり、ニーズはあるのですが、それになかなか対応できません。私は、本当は被災者が支援に回るべきじゃないと思います。支援は外から入った人がすべきだと。例えば益城町は京都府、熊本市は大阪府がやりましようということではできないのだから。

か。全て外に任せて、被災地の職員の負担は思いきり下げてあげなければならぬ、と思います。

上田 ●そういった意味では、運営も極めて重要な役割ですね。

水谷 ●そうです。被災地には自ら支援し

ち、ミスマッチが結構ある。今回いろいろな方たちがボランティアに来てくれた。それを生かしていく、中間点で働き手をマネージしてくれる人といった、いろいろな活動が当然必要である」と言っておられました。同志社がボランティアを送り込んでいくとすれば、同志社側と先方、中間に入ってくる人たちをきちつと関係づける組織をなるべく早く立ち上げていくということだと思います。そういうノウハウなどは当然行政でさらに検討、準備して下さると思いますが、同志社大学全体としても、支援室だけではなくて私たちの意識づくりをもう少し広く、学校で培っておく必要はあるのかなと思います。

同志社と熊本の深い関係

上田 ●学生がボランティア活動に入っていく動機は、最初は人となりがりたいであるとか、言ってみれば利己的な思いであることも多いです。しかしボランティアに携わっていくことで実際に人と触れ合い、何が必要かを考えることで利他性

が芽生えます。最終的に、ボランティア活動で知り合った人たちといろいろな話をしたり、長期間つながっていくことによつて社会性を得ていく。そのあたりに学生ボランティアの意味があるんじゃないかなと感じています。今回ボランティア支援室という形で開設したのは、何かをしたいという学生の思いを受けとめて束ね、運営していくという意味では、非常に意義深いものであると感じております。さて、少し話が戻るかもしれませんが、同志社と熊本とのそもそもの関わりを改めて確認させていただきたいと思えます。木下さん、少し解説をお願いします。

木下 ●解説できるようなものを持ち合わせていませんが、私は『KUMAMOTO』という総合文化誌を出して4年目に入っています。以前、同志社創立140年にあつて同志社と熊本との関係を書きました。熊本バンドと後々言われる若者たちが花岡山で結盟して、京都に上り同志社に入った。第1回卒業生は全て熊本バンドです。彼らを熊本で教えたジェーンズ先生については、この1、2年で

ないといけないというのがベースにありますので、外部の力を効果的に配置することができないという問題はありますよね。

上田 ●実際に熊本におられて、運営面で今回のケースはどのように感じられましたか。

水谷 ●先ほど木下さんがおっしゃったように、熊本では大きな災害はないというスタンスだったようですが、実は行政の災害対応という意味ではどこも一緒です。広島も初めて、常総も初めて、東北も初めてで、初めての対応として、毎回同じことをやっている印象があります。そう言っても今回は、東日本の教訓もわりと見られたのではないのでしょうか。政府がプッシュ型の支援などを言い始めて、どんどん物は押し込んでいった。しかし、末端まで届くのに苦労した。そのためのマンパワーの必要性は反省点としてありますね。

上田 ●越川先生は事後にご覧になっていかがでしょうか。

越川 ●先ほどの難波牧師は、「ボランティアで行きたい人と受け入れる側のマッ

少し分かってきました。熊本近代化への貢献度の高い方のお一人です。エピソードとしては、当時の人々、熊本バンドの学生もほとんどが脚気だったらしいですが、それを、乳製品や肉類を食べることで改善されました。近代熊本の発展に大いに寄与された方でした。その中にいた数名が同志社の社長、総長になられた。その他にも相当な数の熊本出身者や、熊本に戻った校友がいます。いろんなイベント、学校行事を地方で行う時、そのような歴史なども校友がしっかり分かっているといけません。私も少しずつ勉強しています。大学卒業後に入社した地元新設テレビ局に初出社した翌日、開局支援で熊本に滞在中の関西テレビの常務取締役役に、同期の10余名の前で「お前か？同やんは！大学正門にある新島先生の碑の文言、何と書いてある」と問われました。

上田 ●テストされたんですね。

木下 ●「良心の、良心の…」と、4回言うのと、「もうええ」と言われました。そこから、改めて4年間を取り戻さなければいけないと思いました。カタルバ鑑

賞会も、この10年5月になると行っていますが、校友のみんなも少しずつ由来を理解し出しました。素晴らしい学校で学べたことを理解しつつあるのかなと思います。理解してもらわないとまた困りますし。

上田 ●そうですね。特に校友会、同窓会のOB・OGの方々には、そういうことをつないでいただきたいと思います。越川先生はいかがですか。

学生への「熊本教育」

越川 ●現在、同志社の自校教育の一環で、同志社科目の中に「建学の精神とキリスト教」があります。これを1年間で6000人程度、1学年分ぐらいの学生が学んでいます。当然、熊本バンドの影響なども教えています。このような歴史的な事柄以外にも、同志社出身の先輩方が頑張っておられたり、九州学院高等学校・中学校の校長先生が、前校長、現在の校長も同志社出身といった、いろいろな学校とのつながりもあります。本日に、同志社と熊本をつなぐ生きたパイプが

うことで、寒いだけなら段ボールでベッドを作れば、凍死は予防できるんじゃないかと思いました。3月20日頃には作って、ツイッターで写真を流して呼びかけました。それが石巻の赤十字病院のお医者さんらにつながって、「ぜひ欲しい」というニーズがあり、4月1日には200台をトラックで運びました。いろいろ話を聞くと、実は低体温症だけではなく、エコノミークラス症候群、つまり血栓症になつてしまうということも簡単ベッドがどうしても要るということなんです。ところが、どこの避難所へ行っても雑魚寝なんです。2カ月も床に寝ている状態だったんで、これをなくさないことと二次災害はなくなれないということが分かったわけです。例えば東日本大震災の場合は3200名、阪神大震災でも900人が災害関連死されています。直接死の約10%から20%は関連死なので、この予防はできるんですよ。地震は防げないが、避難所での被害は止められる。それに気づき、避難所の環境改善をしていかないといけないと考えて、東日本大震災の避難所に何回も行ききましたし、その間、広島

れると私は思っております。キリスト教文化センターの企画では、10年以上前から「Doshisha Spirit Tour」という名称で、熊本キャンパスを隔年で行っています。学生たちを連れて、ジェーンズ邸も含めて、同志社や熊本バンドゆかりの土地を訪ねています。参加者は毎年10名から15名です。熊本バンドについて全然知らなかつたり頭の中でしか知らない学生もいるわけですが、例えばジェーンズ邸を訪ねて館長さんのレクチャーを聴き、そこに新島襄の写真があつたりすると、ああ、こうなっているのかというふうに新鮮な驚きがあるようです。徳富記念館に行き、花岡山に実際に登り、ここで熊本バンドが奉教趣意書に署名し、結盟して、そこが一つのスタートになっているんだという体験をする。学生だけではなくて教職員も結構行かれる方がおられます。このように熊本との関係は、歴史的にも現実的にも相当深いものがあると私は思っております。

木下 ●偶数年には早天祈祷会前夜祭を熊本草葉町教会で行っています。大学からも来ていただき、前夜祭で講演してもら

長野、宇治市、紀伊半島の豪雨の被災地にも行きましたが、やはり雑魚寝なんです。同じように熊本でも、この規模の大震災が起こると長期化しますので、ベッドが必要だということで、すぐ動きました。

学生だからこぞできるボランティアとは

上田 ●学生でもそうなんです。何ができるかと考えたときに、それは自分の周辺で何が力になれるかということなんです。水谷さんの場合は、それがご自身のお仕事だったのでね。

水谷 ●私は段ボールのパッキングケースの製造販売をしています。実はもう15年ぐらい前から、経営や仕事を通じて世の中のお役に立てる会社をしたい、また自分はそのうありたいと、ずっと考えていました。何をすればいいのかなか分かんりませんでした。何かをしなればという思いがあつたので、東日本大震災の時にもすぐ動けたと思います。災害が起こった時は、シヨッキングな、センサー

災害関連死を防ぐ段ボールベッド

っています。教会会員の皆さんがメインですが、校友を含めて参加しています。

上田 ●同志社と熊本のつながりを現役の学生が意識する機会をうまく増やすことは大切だと思います。少しボランティア関連に話を戻します。水谷さんはボランティアをしようと思われたきっかけは何だったのでしょか。



水谷 ●東日本大震災の時、避難所で低体温症で亡くなった、要は凍死されていたというニュースを見たんです。避難所というのは助かった人がいるはずで、そこでなぜ亡くなるんだと疑問に思いました。聞きますと寒さが非常に厳しいというシヨナルな情報が入ってきます。学生、特に若い人は「さあ何かをしないと」と、かき立てられると思います。ところがボランティアというのなかなか難しい面があつて、私も何回も行っている中で感じたのは、看護師、自衛隊、レスキューだけじゃなくて、水道工事屋さん、電気工事屋さんなど、プロの活躍が非常に頼もしく見えるんですね。有償であろうと無償であろうと、被災者のために手を尽くす。的を射て、しかも被災者の立場から見た支援というのは、そういう意味ではプロの仕事が必要とされるかなと思っています。

上田 ●では学生たちは何をすべきでしょうか。

水谷 ●一例ですが、避難所には小学生も中学生も、高校生もいます。プライベート空間のない避難所で、学校が始まれば当然、子どもたちは宿題もしなければなりませんし、試験もあります。そこで勉強できるスペースを作り、または勉強をお手伝いする。学生なら、1週間単位で家庭教師のようなことをするといったことは意外と喜ばれるんじゃないかなと思

います。

上田 ● プライベートな空間じゃないからこそこできることですね。

水谷 ● そうですね。非常時ではあるけれども、日々の生活が当然あるわけなんです。その中で抱えているいろいろな心配事を支えてあげる。支援というのはまず、思いを寄せることだと思いません。気の毒だな、大変だろうなと思いを寄せることで、その痛みを感じる。いろいろな痛みを感じて、その痛みをみんなで分かち合おうというのが、支援とかボランティアだと思っんですね。例えば小遣いの中から1万円出す。1万円つて我々でも痛いじゃないですか。これも痛みの分かち合いだと思っんですね。お金を出すでもいいし、熊本に実際に行つて汗を流してもいい。この時間も労力も、もしくはリスクも抱えた痛み分けの中で、全ての人が思いを寄せて支えることで、被災地の方たちの痛みを和らげることができるとは思いません。

上田 ● 思いを寄せるのは自己利益ではないですけれども、自分の気持ちとして、最初、自分の中に発生します。実際にポ

一般的なボランティアとして、同志社のボランティアができることは何でしょうか。

木下 ● 今は地震から約3カ月経りましたが、この1週間、震度3や4の地震がまだ続いています。南側の日奈久断層側が揺れているようです。この後にもまだ余震が起こるであろうと想定するとき、被災者に対して何らかの精神的な安らぎを感じていただくための、接触の機会を設けていただくというのはいかがですか。

上田 ● 復興という意味では、日常生活に戻っていくための支援をしていくのは大切なんですが、現状が日常の状態ではありませんので、いろんな意味で、少し日常とは違う関わりや楽しみというの、精神的なストレスを和らげるために必要かなと感じます。例えば同志社の文化活動、あるいは体育活動が、関わっていただける余地があるかなと、今のお話で感じました。水谷さん、いかがでしょうか。

水谷 ● 一つは、私が今取り組んでいることですが、やはり日本の避難所を変えていきたいということです。雑魚寝の避難

ランテアに行くことよって他者の気持ちになる、利他性が芽生えます。そして痛みを分かち合う。このような段階がまさに学生にとつて社会性を育むことになるのかなと考えます。

水谷 ● 一方、私も何回も被災地に行つた中で、言われのない批判もされますし、「何をしに来た」と言われることも多々あります。やはり人間なのでワンウェイより、見返りをしつつい求めがちなんです。しかし、やはりワンウェイというか見返りを求めない気持ちで行かないとならないと思います。それと、個人を見るのではなくて、被災してしまつた人々を大きく見ないと。個人をその都度見ると腹が立つてきますし、やつていられない場面もあります。

上田 ● 現実を見ると、いろいろありますもんね。

水谷 ● そうなんです。自分は何をしているのか、何をしたいのか、どういうお役に立ちたいのか確固とした信念を持つていないと、行つたはいいけど、かえつて自分も納得いかないというような、消化不良を起こすことがあるのも現実です。

所を変えたい。床に寝る現状を簡易ベッドに変えていき、二次災害や災害関連死を減らそうという取り組みです。これは成果を出していかないとけないと思つています。それだけではなくて、避難所というのは衣食住なので、まさに日常なんです。日常の中に例えば改善すべき点がたくさんあります。その中でいろんな学問があつて、その学問は日常なんだけど、災害時という非常時にお役に立てる部分が、各分野の中で必ずあると思うんです。災害というと自然科学系ばかりではなく、どちらかといえば人文的な分野。社会福祉、栄養、経済、法律。これらのうち有事で活用できる部分を集結できないかなと思います。例えばオール同志社として、いろんな専門家が熊本のために取り組むチームみたいなのができればどうか、その結果先ほどの、痛みを和らげる方向に導くことはできないかなと思ひます。

上田 ● そういった意味では、学生だけでなく、教職員を含めたチームですね。
水谷 ● そうです。学生も教職員も含めてです。私も最近「避難所と避難生活学会」

そこも踏まえて、やつぱりある程度覚悟を持つて現地に行くという姿勢は必要かなと思ひます。

**日常に役立つ学問を結集させて
災害後の長期ケアに役立てる**

上田 ● そもそも同志社は良心教育です。良心とは何なのかというのは難しいことかもしれませんが、一つは、やはり見返りを求めないということにも帰着するのかなと思います。ボランティア支援室開設に当たつても、そういった意味で、良心教育に基づく徳育からの教育の一環という部分もあります。ただ現場へ行く、現実的にいろいろなことがありまして、何しに来たんだという目で見られて嫌な思いをすることもあります。学生たちこそで社会を見る目を養つていければいいと思っんですね。実際に同志社が熊本でできることは何だとお考えですか。

木下 ● 先週の土曜日も20人ばかり幹事が集まつて話し合いましたが、即座に意見を出せる人というのはいないんですよ。
上田 ● 確かに、それは難しいと思ひます。

を立ち上げ、いろんな分野の方に集まつてもらつて、避難所を良くしようという学びを始めました。

上田 ● 災害があつた場合、その事後が大切ですね。

水谷 ● ああ助かつた、よかつたねで終わるのではなく、実はそこから長い長い苦しみ、トンネルが始まっています。被災された方はその部分に苦しんでおられます。ある日突然、精神的な苦しみも肉体的な苦しみも抱えてしまうのですから。そこをクローズアップして支援したいですね。

**キリスト教文化センターの
取り組み**

上田 ● 思わぬことに対して心の準備をしておくことは大切だと思いますし、そのためには蓄積が大事ですね。今回設置されたボランティア支援室というの、学生が何かしたいという気持ちを持ちながら、どうしたらいいのか分からないときに尋ねに行く情報集約の場でもありますし、これまでの経験を蓄積する場にもな

ると考えています。越川先生、キリスト教文化センターの取り組みとしてはいかがですか。

越川●私どもの場合は学内のことがどうしても中心になります。今回は、ボランティア支援室が立ち上がりましたので、そこを通じてのさまざまな活動に協力するという形でセンターとして少しお手伝いをさせていただきました。今まではこのような大きな災害が起きると、キリスト教文化センターで募金活動をするのが一つの定番の活動になっていました。

上田●ありがとうございます。今回も募金活動を4月22日から5月31日まで行いました。キリスト教文化センターにもお手伝いいただき、50万6958円が集まり、赤十字へ送りました。

越川●キリスト教文化センターの学生スタッフが、最近結構増えてきました。約30名が名を連ねていて、その学生たちに学内での募金活動をやってくれるかと言ったら、約10名が手を挙げてくれました。そこでボランティア支援室にレクチャーしてもらい、今回実施しました。こういう直接的で本場に物質的なものを含めた



手法は当然、大事になってくるんですが、やはりそれを支えていく精神的なものとか、気持ちの面で支援も行えるかなと思っっています。例えば、チャペル・アワーが毎週行われています。震災直後などは牧師のお祈りがありました。そこに集まっている100名、200名の学生はそれを聞いていますので、それを通して祈りの機会があります。ものすごいスピードで私たちの社会は次々と動いていきます。残念ながら距離が遠いと、東日本ということも忘れてしまうし熊本のことも忘れてしまうということがあります。そうしたとき、募金をしている学生がいるとか、あるいはチャペル・アワーでお祈りするとか、何らかの形でそうしたものを少しでも覚えていてということですね。先ほど思いを寄せるというお言葉があり

本と同志社の関係を大切に守りながら、学生の成長にも目を向けたプログラムが今後も大切かと感じています。ボランティア支援室でも、学生の思いをコーディネートして、これからの活動を蓄積していければと感じています。

越川●少し付け足しておきます。東日本大震災の時、いろんな学生たちが結構自発的にボランティアに行きました。戻ってきた段階で「東日本大震災学生ボランティア報告会」を、うちのセンターが後援するような形で公開で行ったことがありました。今回は、熊本に実際に行った学生、関わった学生たちが、学内にいる学生に自分たちで報告するというのは、非常に大事だと思いました。チャペル・アワーでも、やはり実際に行ったボランティアの学生に話をしてもらって、それにも多くの学生が聴きに來ます。学生自身は、自分の経験したことを戻すというのはすごく有効だと思っています。

ましたけれども、そうしたことになるかもしれない。「忘れない」ということでしょうか。そういう意味では、熊本のことを忘れないようにする努力を行っていくことは、私どものセンターの中でも広い意味での取り組みの一つだと思います。

あとは、うちのセンターと少し離れるかもしれませんが、学生だけではなく、教職員がそうしたことを覚えることは大事かなと思います。例えばこういう座談会を企画して、読んでいただけるといいのは、これはとても大事な取り組みの一つだろうと思います。あとは同志社の中で、良心学と実践みたいな問題で、現実の中で働いてこられた方を、学問とか知的なものどう結びつけていくか。これはやはり大学という場では十分行えるし、行うべきことだろうと思います。

**被災地を覚え
現地で活動した思いを
分かち合う**

上田●ありがとうございます。水谷さん

**同志社ゆかりの地の
復興に向けて**

上田●そうですね。他の学生にも刺激になります。何かをしたい学生に対しての啓発にもなると思います。そういう機会を増やしていくことも、今後積極的に考えていきたいと思っています。

木下●校友会としては「熊本地震 同志社ゆかりの地 基金」の募金活動を2017年3月まで行っています。ゆかりの地には、ジェーンズ邸と、徳富蘇峰・蘆花兄弟の記念園があります。記念園は熊本市の文化財であり、熊本市が所有者です。ジェーンズ邸は県の文化財に指定されています。花岡山はまったく指定はございません。もちろん熊本草葉町教会もゆかりの地としてあります。現在ジェーンズ邸は崩壊したままになっています。この書物類や部材をできるだけ早く救出してクリーニングが必要ですが、その費用だけでも1000万から1500万円かかるのと市の文化振興課は言っています。その部分に特化した目標金額を1500万円に設定して、当初、校友会では

からは熊本にとどまらない支援、越川先生からは忘れないということ、木下さんからは実際に今できることとして様々な活動があることを伺いました。今回、現地活動をいたしました学生からフィードバックを受け、学生が自ら進んで現地でボランティアをすることによって、他者のこと、それから災害についても自分が主体的に捉えることができたというふう



ゆうちよ銀行に口座を作りました。その後、国税や当該税務署とキヤッチボールしながら、地元の銀行2行、肥後銀行と熊本銀行に口座を開きました。熊本市では、恐らく熊本城の復旧が最優先になるでしょうが、まず、同志社ゆかりの地に特化した形でこのような活動をする事によって、ジエーンズ邸の復旧の順番が少しでも早まるように、というのは同志社のできることのひとつかもしれません。ここで集めた来年3月末終了時点での金額を、熊本市が持つ「熊本市文化財保存修復基金」に入れるということで、これは控除対象になります。個人の場合でしたら、2,000円を引いた残り分に対しての控除、企業の場合でしたら損金扱いできるということです。

上田 ●水谷さんも、他に何かありました

らお願いします。

水谷 ●先ほども少しお話ししましたが、災害が起きると避難所ができませんが、人がいるから「災害」なんです。例えば山奥で土砂崩れになっても、それは災害とは言わない。そこにはやはり、「生活の瓦解」という意味がある。そこをみんな支えようということで、私の場合は「避難所と避難生活学会」を立ち上げ、今までクローズアップしてこなかった長期避難をいろんな角度から改善したいと思っています。そこを同志社からも力をお借りできたらと思っています。私自身も今、実は大学院生で、その研究をやっています。そんなこともあって、同志社にも一緒に入ってきてほしいなということも思っています。

上田 ●ありがとうございます。皆様、今日は忙しいところ本当にありがとうございます。ありがとうございました。

(2016年7月12日)